

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	散歩 〈一般〉
Auther(s)	S. U.,
Citation	広大言語 , 11 : 37 - 39
Issue Date	1971-12-06
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046376">http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046376</a>
Right	
Relation	

くす。「われが出て人に会う」という時、我が人に会い、人が人に会い、我が我に会い、出ること：が出ることに会うことと同じである。」ここには他者と我者の2元的、見えるものと見えないものの区別、主と客との入り込む余地は全くない。青山が歩み、石女が子を産む、山は流れるの心境である。次元が違うのである。決して静寂ではない。動きがある。生き生きとしている。良寛の、「ぬす人に取り残されし窓の月」は、彼の深い人間の愛を感じさせ、「銀鉢に明日の米あり夕涼み」の句を觀ても、現代の吾々の生き方を反省させる。物的ことばが多すぎる為か混乱している現代は又特に流行が我々を支配し、生きる上に不自由を生じてくる。彼の自由を極めた態度は主観と客観のことばから自分を解放したものではないでしょうか。日常生活に感じられる目的論的觀念やことばや論理の囚人となることから彼は一切超越しているのです。日常生活の事実を素直に取り、具体的に指し示し、自己体験し、つくりものにおちいることなく、純粹的知と行動を導く自由が結合する時、転回が生じ、論理と直観を超越して、古い組織的型を突き破り、そこから創造が生まれる。幻想から相對へ、そして究極の内成実、絶対的なものに、即ち空を生み出していく。しかし、それは同語反復を根元的なものとする。同語反復から詩が発見されていくのである。今の単語と文法の構造による形式論理の問題点ははっきり言えば、砂上の城である。ハイデッガーは「主観客観の対立は意識の志向性を解せざることによる。」と言う。どうしても岩の如く不動な基底又は深層構造が必要である。和辻氏は「志向性は人の間柄に属する。」と言う。それを提供出来るのは日本語の大きな役目とするところである。超越性それ自体にかかわる時に、沈黙が問題になり、超越性を促えようとするものが、ことばを重視する。不可得底をめざめさせるのが日本語の重大な任務であろう。

## 散 歩

### S. U.

今から書いてみようとしていることは、多分誰もがよく感じていることで、それは、いつも目にし耳にしている散歩道の色々を、今日また秋風に吹かれるまま歩きながら、時には立ち止まって、眺めてみようかといった様なことである。

散歩道いやなやつみてかくれば、

木かげの2人にキッとにらまれ

「秋は、夕暮れ……」と、大そう美しく秋を言い表わそうとした人が、その昔居たそうだが、なかなかどうして、現代のこの秋を言い表わそうものなら、まあ1冊の本にして、かなりのページ数を要するのではなからうか。広大言語の最終〆切日は10月29日になった。後9日は秋祭りである。田舎の人なら、「お祭り」と言えば、農村の秋の風情全てが表現されていると感ずるかもしれない。明け方る時過ぎ、ひざの上にかけられた毛布の表面は、露でしっとりとなれ、空の星は薄曇にかすみながらも、そばで可愛い顔していびきをかきながら寝ている妹に、フエの音、タイコの音に合わせてあの青白いウインクを投げ下していた。かなり昔の想い出である。この秋祭りイグの大人も子供も一緒になっての夜ふかし、こたえられぬ楽しみであった。こんな秋祭りの経験は、今の町で育っ

た人々には無いかもしれない。そんな現代子には、あの秋祭りの田舎の人々の感じを表現し伝えることは出来ないのではなからうか。少なくとも、それを肌で感じようとしなない人にとっては、どんなにことばを駆使しても、所詮無駄であろう。ともかく、その人なりに受け取ることは出来るであろうが……。

ちょうど、大学紛争（一般的にはこう呼ばれているが、闘争と言う人も多い。これは、立場の違いからであろう）もはなやかなりしころ、ことばの虚実性について論じられたことがあるが、確かに、誰もが、自分たちのことばのむなしさに気付かされていたころのことであつた。そのころ、ぼくらの間で、「ことばは、美しい！」という表現があつた。解釈は1つである。ある表現の表面だけではつかまえても、その話者が真に伝えたい内容を十分理解出来ない様なことを経験したことは無いだろうか。あるいは、その内容を理解することが自分に不利になると直感する様な場合、極力自分だけの世界に閉じこもり、その表現の真の内容と自分との断絶を計ろうとするこの人間の人間たる心故のむなしさを感じたことは無からうか。「『そうではない。そうではない！』と私は言っているのだ！」——本当は、「そうだ」と思っているかも知れないが……。

この様なことを考えながら、映画館に足を向けると、なるほどと思わされるのは、現代の映画の傾向である。「トーキーの出現は、映画の台詞全盛時代を作ったが、現代の映画は、それに比べると非常に台詞の量が少なくなって、その代り、音楽とか、カメラワークによる伝達の表現を可能にしようとしている」と云う様な何か映画についての論評を耳にしたことがあるが、ことばの虚実性と関係無いことは無さそうである。ロックフェスティバルの流行っている今日である。「シビレちゃった！」これが現代を表わすさえたる表現かもしれない。シビレはすぐなおる。佐藤さんも、かなりシビレたらしいし……？

さて、あまり白々しくならないうちに、さっきのかぐら見物のムシロをしまおう。日本の伝統芸術の表現方法について、少なからずインテリくさい外人なら、必ずと言っていい程、興味を示し、日本人のその無関心さにおどろいている様だ。これも、多分にめずらしさということが、彼らをそう言わせているのであろうが、でも確かにこの様な表現について、言語学の観点からも、もっと追求してみても面白いのではなからうか。……「脱線」と言う声が聞こえる……。かぐらには、知っている人は知っていると思うが、ほとんどことばは無い。はやしあるいは舞いの速度や強度などにより、また役者の衣裳によって、ほとんどの内容を観客に伝えることを可能にしている様に思える。「ヤマタのオロチ」、「吾我兄弟」、「大江山」等々。ことば無しでの対話、あるいは情景描写。子供心に理解していたのだろうか——となりで姉などの説明があつたのも覚えているが。これにも約束事があるのは確かである。また、ロックと共通性を見つけられるかもしれないが、ぼくはロックにシビれないし、かぐらなんてハダに合わないと言う人の方が圧倒的に多いだろう。「神」より「キリスト」がもてる現代である。

つまらん事を書いていると思われ、それでもなおここまで読まれた方は、最後にも1つ、あなたの愛の伝達表現をちょっと考えてみて下さい。

ことばのむなしさを木の葉の散る音に感じながら、目的もなくブラリブラリと歩いていると、人

間どもにその枝を切られ、その幹にはコモをまかれ、それがまた一つの自然なのだという顔をした街路樹が目に入る。もがれたり、つけられたり、面白いと思えば面白い。何かに似ていると思ってしばらく眺めていると、最後に「断絶」ということばが飛び込んで来た。

秋祭り

シャンソン聞きつ

辞書を引き

## All My Sons 論

田村 正夫

「私」にとって社会とは何か、これは人間が集まり、組織形態を組むところどこにおいても未解決の問題であり、文学作品においても主要なテーマとなっている。それは「私」という私的状況と「社会」という公的状況、いかえれば、個的レベルの問題と全体的レベルの問題の相克である。

いまぼくは、現代アメリカの劇作家 Arthur Miller の作品 Incident at Vichy を読み終え、次に All My Sons を読んでいる。Arthur Miller は以前、今は亡き Marilyn Monroe と結婚したことがあり、その方面から探っていけば、あるいは彼のおもしろい人間像が浮<sup>く</sup>上がるかもしれない。しかし、その方面の知識に乏しいぼくは、やはり彼の作品を中心に据<sup>か</sup>えて、そのなかで彼が追求した「私」にとっての「社会」とは何か、を考えていくよりしようがないようである。

戦争成金である工場主 Joe Keller が破滅していく過程は、ギリシア古典悲劇のそれに似ている。ソポクレスは、その作「オイディプス王」において、劇中の出来事の構成を「真相の発見」と、それによる劇中人物の「運命の逆転」に緊密化させた。その作劇手法は、All My Sons において、息子 Larry の死因が父 Keller の狂気じみた軍需品製造と関係があるとわかったとき（真相の発見）の Keller の運命の逆転となっている。この手法は観客を劇中人物とともに、悲劇の頂点へ引き上げる効果を持つ。そうして、Keller は、オイディプスと同じく、登りつめた頂点から一気に破滅の道を転がり落ちる。

Keller の死が哀しい詩であつたとしても、それは、彼の置かれている状況からの可能な限りの抗議の死である。「オイディプス王」の場合、人間が運命という見えない糸に操られ、ついには自虐に赴くの<sup>に</sup>比して、Keller の死は、彼が切開いていった人生の終局であり、あくまで人為的な悲劇の終末とみたい。ここに、ぼくは、人間の可能性が古代以来発展してきたその<sup>か</sup>らをみる。つまり、個人にとって、古代ギリシアにおいては運命が絶対的、支配的であつたの<sup>に</sup>対し、現代においては人為的な社会という虚構が問題なのである。絶対的な運命の超人為性は、科学的、合理的精神の発展によって人間の可能性の<sup>か</sup>のなかへ組み入れられたのである。従って、オイディプ